

Whoops!

2016 AUTUMN Vol. 14

多摩美術大学フィールドワーク設計ゼミ 発行

NAVIGATION

特集 童画

「The Power of Colors」展
「宇宙と芸術展」

洋服と和服の境界線を考える
「死体解剖医ヤーノシュ」(DVD)



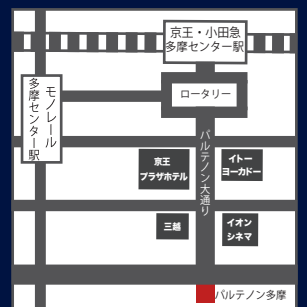
美術 あいまいな パラダイム

和田	山本	花沢	田中	田中	田中	末永
真由子	努	忍	真吾	智美	和人	史尚

美術—あいまいなパラダイム

パルテノン多摩展
2016年11月11日(金)
～11月20日(日)
(15・16日は休館)

10:00～18:00
(最終日は17:00閉場)
多摩市立複合文化施設
パルテノン多摩
特別展示室



京王線・小田急線・多摩モノレール
多摩センター駅下車 徒歩5分

主催：多摩美術大学美術学部芸術学科 TAMA VIVANT II 2016 企画室
共催：公益財団法人多摩市文化振興財団
協力：多摩美術大学生涯学習センター
株式会社ハシモトコーポレーション

お問い合わせ：多摩美術大学美術学部芸術学科研究室
〒192-0394 東京都八王子市鍵水 2-1723
E-mail tamavivant2016@gmail.com
TEL 042-679-5627 FAX 042-679-5649
twitter@tama_vivant2016

4 Whooops! 見聞記

菊池寛実記念 智美術館「The Power of Colors」展
／実験と経験の果てに現れる「色彩のちから」を見る
森美術館「宇宙と芸術展」
／芸術に宇宙の謎を解く鍵はあるのか

10 Whooops! 考

洋服と和服の境界線を考える

11 OG 便り

安部未来さん（木下大サーカス団員）

12 特集「童画」

童画の誕生をめぐる展覧会に出かけてみた
ミロコマチコの絵本に見る「童画」の力
コラム：飛び出した童画

16 TAMABI REPORT

上坂真人さん／写真雑誌『IMA』の目指す
「健全なアートマーケット」とは

17 Whooops! 鑑賞記

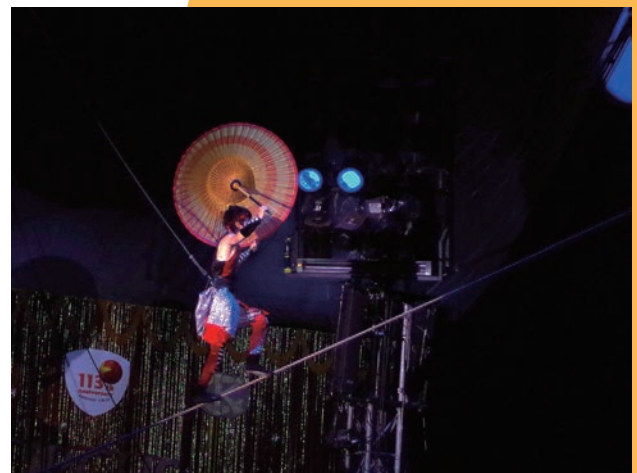
「死体解剖医ヤーノシュ」(DVD)
／ある死体解剖医の日常を追うドキュメンタリー

18 面白まんが

19 芸学ヴィジュアルコンテスト2016秋 結果発表！



(上)「宇宙と芸術展」(森美術館展示風景)→P.06



(下) 木下大サーカス公演風景 (撮影=遠藤菜摘)→P.11

Whooops![ウーブス] 2016 AUTUMN Vol.14

発行日= 2016年11月02日

編集長=小川敦生(多摩美術大学芸術学科教授)

編集=小林真弓、ド・ソルヒ、笛木一平、増田啓志、横山亮、椋田大揮、

小川敦生

誌面デザイン=ド・ソルヒ、増田啓志、横山亮、椋田大揮、小川敦生

表紙・目次レイアウト=ド・ソルヒ

表紙写真=木下大サーカスの公演風景／一番前にいるのが本学科卒業生の安

部未来さん(写真提供=木下大サーカス)

発行=多摩美術大学芸術学科フィールドワーク設計ゼミ

〒192-0394 東京都八王子市鎌水2-1723

印刷=株式会社ハシモトコーポレーション

問い合わせ先= aogawageige77@yahoo.co.jp

Twitter @aogawageige77 Webzine「タマガ」= QRコード

●掲載記事、写真の無断転載を禁じます。



Whooops! について

本誌を手にとっていただき、ありがとうございます。誌名「Whooops!」は、「あっ!」という驚きを表しています。あなたの中で何かが弾けてほしい、刺激的な日々を送ってほしい。そんな思いを込めて制作しました。

お読みいただくうちに小さな「あっ!」が生まれてくれますように!

実験と経験の果てに現れる「色彩のちから」を見る

東京・虎ノ門の菊池寛実記念 智美術館で、「The Power of Colors 色彩のちから」展が開催されている。やきものの色彩に注目したこの展覧会は、色彩のちからを明らかにしながら、同時にある問題を提起しているのではないかと感じた。

菊池寛実記念 智美術館に入り、円弧を描く螺旋階段を降りた。まず目に入ったのは、やや奥の方に展示されていた三代徳田八十吉の九谷焼の作品。黄色から群青へのグラデーションが、中央から光が広がっていきような鮮やかさを見せている。これは本当にやきものなのか、と思わず立ち止まって考えてしまった。右を向くと、そこには加藤委の《Freeze Flame》が静かに光を浴びている。白い磁器の肌はそこにかかった釉薬が発する水色も合わさって氷のような冷たさを思わせるが、荒々しく削られたこの磁器特有の先端の鋭さは、むしろ炎の舌先がチロチロと揺らめいているかのように感じさせた。グラデーションが鮮やかな徳田の作品と、炎の舌先がちらちらと見えながらも涼やかな加藤の青白磁。どちらも、この展覧会のタイトルである「The Power of Colors 色彩のちから」という言葉に惹かれて訪れた人々に強い印象を与えるに違いない。

この展覧会では、菊池寛実記念 智美術館の創立者である菊池智さんが1900年代の後半期に集めたコレクションから、陶磁器の色彩の魅力に着目して選んだ55点の作品を展示している。展示空間は3つの展示室に分かれており、それぞれ異なるテーマが与えられている。

徳田の作品の右手に開いている通路を通ると第1室。陶磁器の持つ色そのものに着目した部屋である。赤い土、コバルトの青色、酸化銅による釉薬の透明感のある緑など、展示室はさまざまな色であふれている。ひと際目を引くのが、入り口から見えた作品の作者である三代徳田八十吉のもう一つの作品《燿彩鉢<黎明>》である。大きな丸い鉢の表面に、白から黄、そして群青へと変化するグラデーションが表れている。興味深いのが、中央部分が一際色が濃くなっていること。同館学芸員の高田瑠美さんによると、絵の具を塗った陶磁器を焼く時にはその絵の具に適した700～800度で焼くのが普通とされているが、徳田はこの作品を1000度以上の高温で焼いたらしい。そのため絵の具の一部が溶け、鉢の中央に流れてたまった結果、このように深い色が表れたというのだ。さらに、この作品を展覧会のポスターに載せるために撮影をしたところ、

作品の下半分に深い赤紫が差し込まれているのが分かったという。徳田は大の海釣り好きだった。そのエピソードを聞いた後に再び作品と向き合くと、美しい色の帯の数々が、黎明の空と、そのわずかな光を受けて輝く海の姿のように見える。

第2室に入ると、カラフルな色彩にあふれた第1室とは違った雰囲気、そして色合いを感じる。ここは「色絵」がテーマである。色絵とはその名の通りさまざまな色の絵の具で彩られたやきものことだ。やきものの表面にはカラフルな虫や花や鳥が描かれている。多くは、藤本能道の作品だ。藤本は、本来は釉薬を掛ける下地作りの段階で色の付いた釉薬によって絵を描く「釉描加彩」という技法を編み出した人物である。本体を焼き上げた後、さらにその上に絵の具で描く技法と組み合わせることによって、独特の奥行きを持つ表現が生まれている。また藤本は、表面に絵付けをするための絵の具が最もよく映えるように、さまざまな種類の釉薬を作り出した陶芸家でもある。《霜白釉描色絵金彩花と虫図六角大筥》の下地には、「霜白釉」という藤本が独自に作った釉薬が使われている。藤本が開発した釉薬の白にはたくさんの種類があるが、その中で「霜白釉」に含まれるバリウムは古来から使われている赤色の釉薬である辰砂釉の反応を助け、鮮やかな赤の発色に一役買っているという。赤い花と金色の虫のまるで爆発しているかのような鮮やかさは、このような実験によって作り出されていたのだ。

第2室を抜けると、壁に写真家の六田知弘による那智の滝を写した大きな白黒写真。その手前に深見陶冶の青白磁による作品《蒼き狼》があった。ここが第3室である。深見の作品の前に立って2つの作品を視野に収めると、《蒼き狼》が六田の滝と一体となって流れ落ちている一瞬が目の前に立ち現れているように感じた。しかし、この2つの作品に全く違うイメージを想像している人もいるかもしれない。それどころか、今この部屋に立っている自分と明日この部屋で同じ光景を見る自分が、必ず同じイメージを抱くことができるとどうして言えようか。そのことに気づいた時、高田さんが言っていた「やきものの色はどれだけ経験が

あったとしても、実際に焼いてみなければわからない。一番いい色が出るまでに何百個も焼き続ける陶工もいる」という言葉を思い出した。作家たちが追い求めた色を、どう受けとめればいいのか。「The Power of Colors 色彩のちから」展は、陶磁器の豊かな色彩の世界を見せてくれるだけでなく、色彩とじっくり向き合う場を提供してくれる。今見ている世界にあふれる色に対して新たな視点を持つ機会をも与えてくれるのではないだろうか。

取材・文・レイアウト＝増田啓志
写真提供＝菊池寛実記念 智美術館

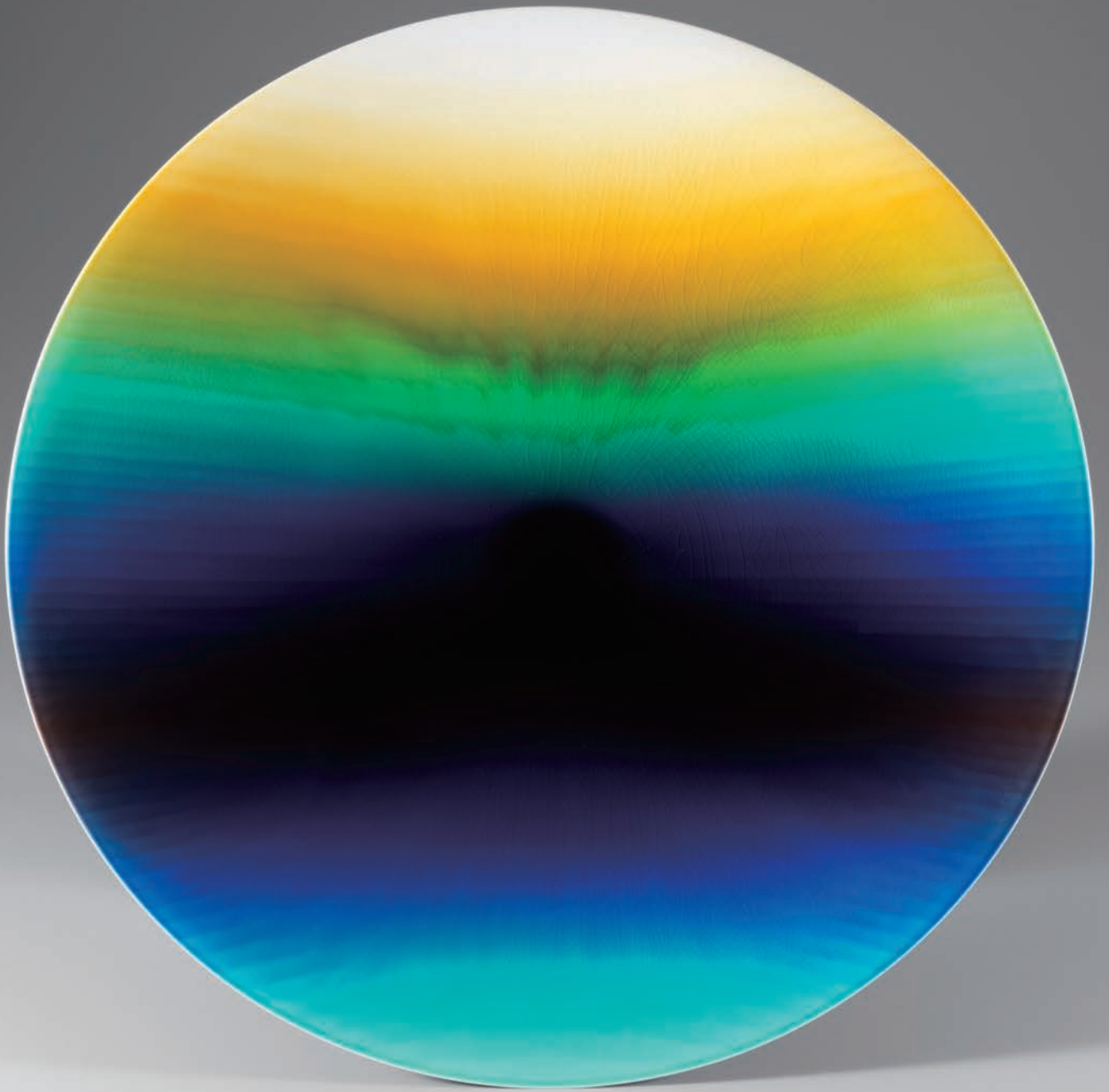
「The Power of Colors 色彩のちから」展
2016年8月6日～12月4日、菊池寛実記念
智美術館（〒105-0001 東京都港区虎ノ門4-1-35
西久保ビル B1F）



加藤委《Freeze Flame》
(1993年、58.5 × 29cm 撮影＝尾見重治、大塚敏幸)



藤本能道《霜白釉描色絵金彩花と虫図六角大筥》
(1990年、32 × 36.6cm 撮影＝尾見重治、大塚敏幸)

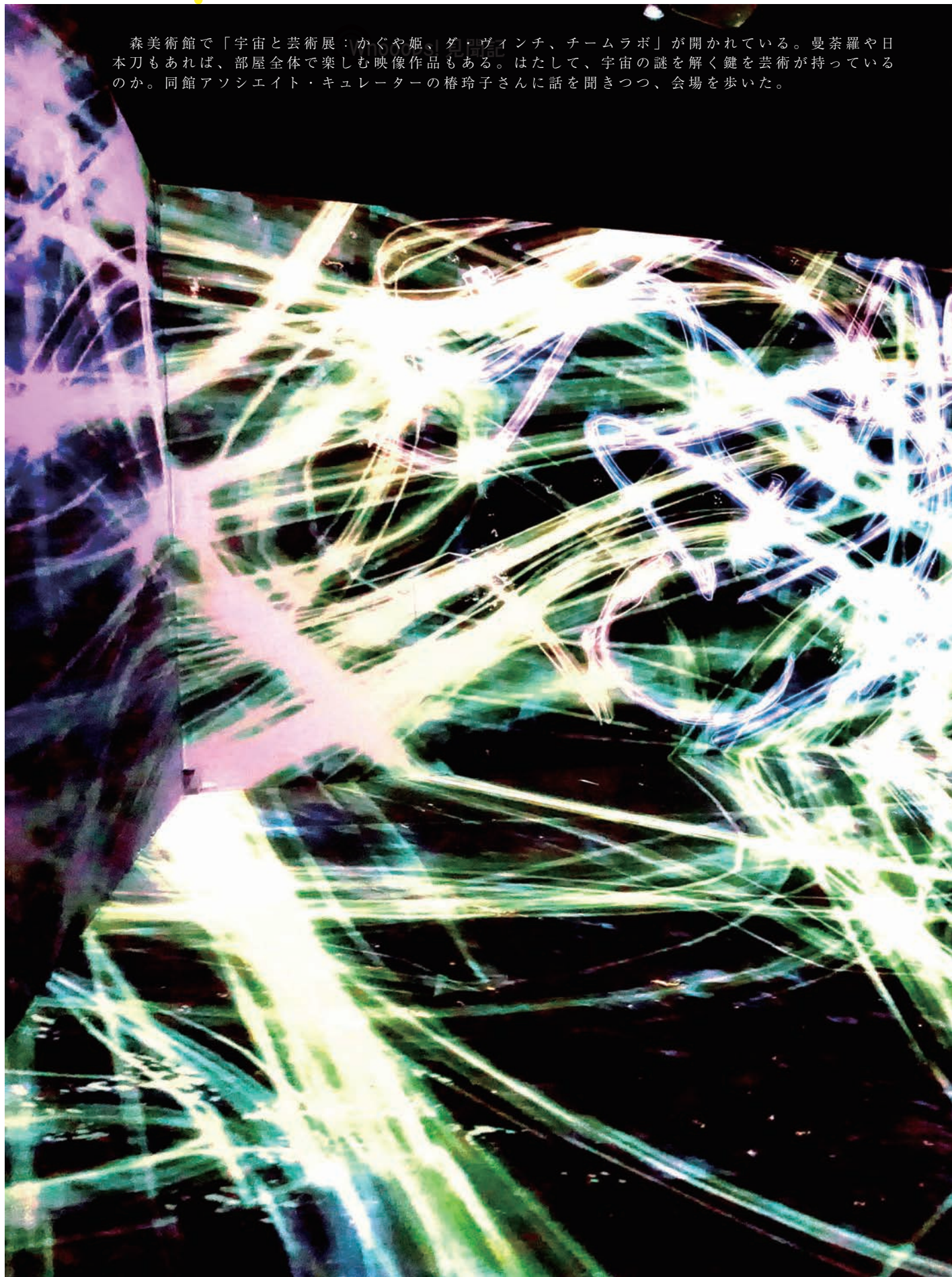


三代徳田八十吉《耀彩鉢〈黎明〉》（1986年、径45.6cm 撮影=尾見重治、大塚敏幸）

Whoops! 見聞記

芸術に宇宙の謎を解く鍵はあるのか

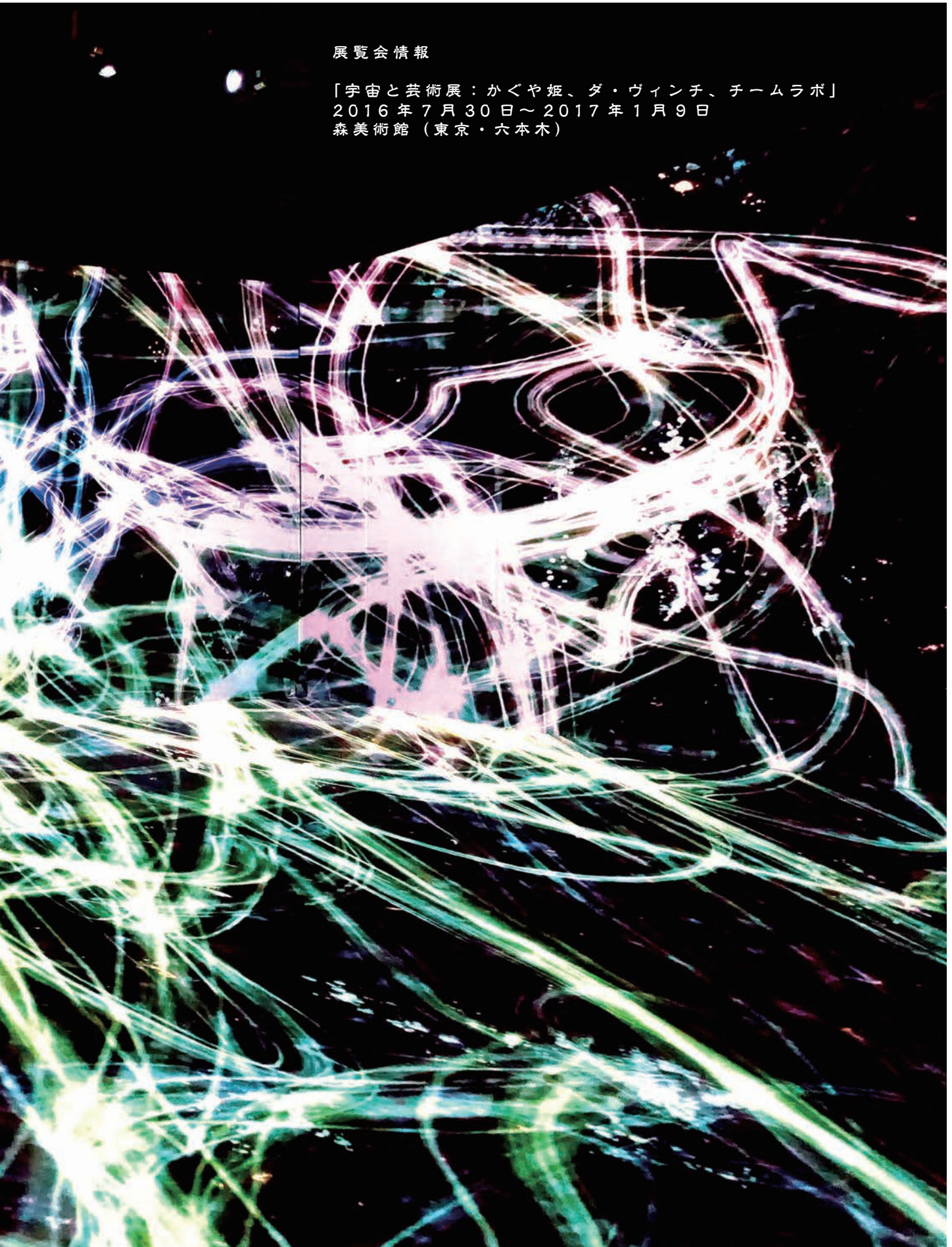
森美術館で「宇宙と芸術展：かぐや姫、ダ・ヴィンチ、チームラボ」が開かれている。曼荼羅や日本刀もあれば、部屋全体で楽しむ映像作品もある。はたして、宇宙の謎を解く鍵を芸術が持っているのか。同館アソシエイト・キュレーターの椿玲子さんに話を聞きつつ、会場を歩いた。



チームラボ《追われるカラス、追うカラスも追われるカラス、そして衝突して咲いていく -Light in Space》展示風景 (*). 天井を除く壁や床に映像が映され、部屋の内部に作り出された宇宙を白い鳥が縦横無尽に飛び回る。同展カタログによると、白い鳥はヤタガラスだという

展覧会情報

「宇宙と芸術展：かぐや姫、ダ・ヴィンチ、チームラボ」
2016年7月30日～2017年1月9日
森美術館（東京・六本木）





北山善夫《この世界の全死者に捧ぐ》が展示された会場入口付近(*)

東京・港区の森美術館で「宇宙と芸術展：かぐや姫、ダ・ヴィンチ、チームラボ」が開かれている。芸術は宇宙をどう表現しているのか。あるいは宇宙の謎を解く鍵を芸術が持っているのか。興味をふくらませ、足を運んだ。

展示作品数は約200点。「人は宇宙をどう見てきたか?」「宇宙という時空間」「新しい生命観——宇宙人はいるのか?」「宇宙旅行と人間の未来」の4部構成だ。

最初の展示室に、静かな佇まいを見せる作品があった。北山善夫の《この世界の全死者に捧ぐ》だ。黒い画面に白い点や線で星々や銀河が描かれている。白い点は顔を近づけて見なければならぬほど小さく、クリームがかかった白や暗い宇宙に溶けてしまいそうなほど薄いもの、逆にははっきりと描かれたものなどさまざま。宇宙の星がすべて違いを持つ存在であることがわかる。

それにしても、なぜ《この世界の全死者に捧ぐ》という謎めいた題名がついているのか。この作品の宇宙は普段テレビなどで見る宇宙とは違うのではないか。そんなことをぼんやりと考えながら歩を進めた。同じスペースに、仏教の世界観を表す《両界曼荼羅》や国友藤兵衛重恭が1836年に制作した《反射望遠鏡 銘一貫斎眠龍能当(花押)》、さらにその望遠鏡で観測した月を描いた《月面観測図》、岡吉国宗が隕鉄で作った《流星刀》などが展示されている。

ある作品が目にとまった。17

世紀の《熊野観心十界曼荼羅》である。人の背丈ほどの画面の中央には心という字があり、一番上方には人間の一生を描いた老いの坂道がある。その坂道の下には、仏や天女、悟りを開いた僧侶が住む極楽、さらに下には鬼や四悪道(地獄・餓鬼・畜生・修羅)に落とされた人々のいる地獄の風景、すなわち死後の世界が表現されているのだ。なぜ時代を大きく縦断した作品が同じ展示室にあるのか。展覧会を企画した同館アソシエイト・キュレーターの椿玲子さんに理由を聞いた。

「『人は亡くなったら星になる』という考え方があるように、宇宙と死後の世界はつながっていると考える方がいる。北山善夫さんの作品もそうだが、《熊野観心十界曼荼羅》には仏の世界とともに人間の世界も描かれている。つまり、どんなに科学が発達しても、神話や宗教の育んだ世界観は重要であり、また最新の宇宙像とそうした宇宙観は繋がっている所もあるのではないかと。それが展示の根底にあるのです」

後日展覧会カタログを読むと、北山善夫の《この世界の全死者に捧ぐ》について椿さんは次のように記していた。

「この宇宙では、人々の魂が消えたり、生まれたり、参集したりするように見え、仏教やヒンドゥー教に見られる輪廻転生をも想起させる」

北山にとって宇宙を描くことは死後の世界を描くことだったのか

と納得した。

「新しい生命観——宇宙人はいるのか?」の展示スペースで、奇妙な作品が目をつめた。パトリシア・ピッチニーニの《ザ・ルーキー》。黄土色の芋虫をひっくり返し、人間の赤ん坊の手足と顔を付け、所々に毛が生えたような外見の生命を表した立体作品だ。近づけば近づくほど、赤ん坊のような目、皮膚のしわや筋、背中の産毛など、あまりにも人間っぽいくらい。遺伝子工学によって生まれた生物だとされているが、アーティストの想像力と再現力に舌を巻くと同時に、宇宙人もきっと地球人と同じように命を大切に、懸命に生きようとしているのだろうかなどと夢想した。

「宇宙旅行と人間の未来」の展示スペースで一際目を引いたのが、トム・サクスの《ザ・クロラー》。紙や木、金属製のフレームで打ち上げる前のスペースシャトルと打ち上げるための移動式の台を制作し、作品として見せたものだ。スペースシャトルは、宇宙旅行の代名詞のような存在だ。しかしこの作品は、実は打ち上げから73秒後に空中分解したスペースシャトル「チャレンジャー号」をモデルにしたという。ただ作品の姿を見ると、表現された内容を知って鑑賞に臨むのとは、見え方がまったく違ってくる。宇宙旅行は希望に満ちたイベントだが、未知の世界への旅立ちにははかなさが伴うものなのかもしれな

い。

出口の間際では、チームラボの《追われるカラス、追うカラスも追われるカラス、そして衝突して咲いていく—Light in Space》で宇宙を体験できる。部屋の内部の四方の壁と床に映像を映し、宇宙にいるような感覚を味わえるのだ。壁や床を白い鳥が虹色の線を描きながら高速で飛び回り、画面もそれに合わせてめまぐるしく動く。座り込んで鑑賞すると、まるで宇宙に放り出されたような感覚を覚えた。そのうちにハスの花が咲き始め、金色の光が滝のようにあふれる。さらにたくさんの白い鳥が飛び出し、光景がループする。

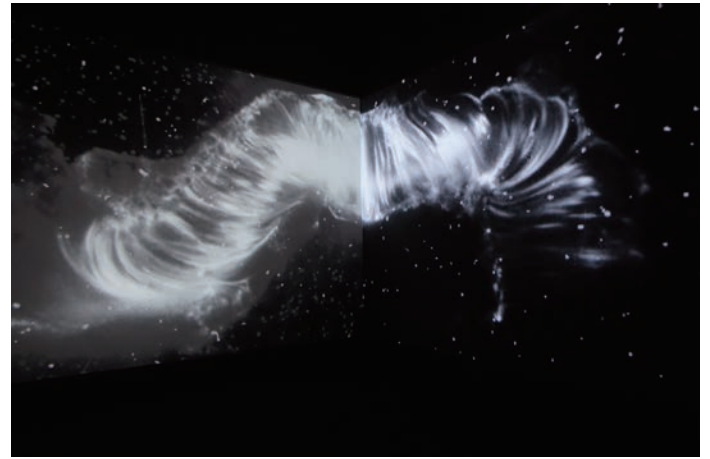
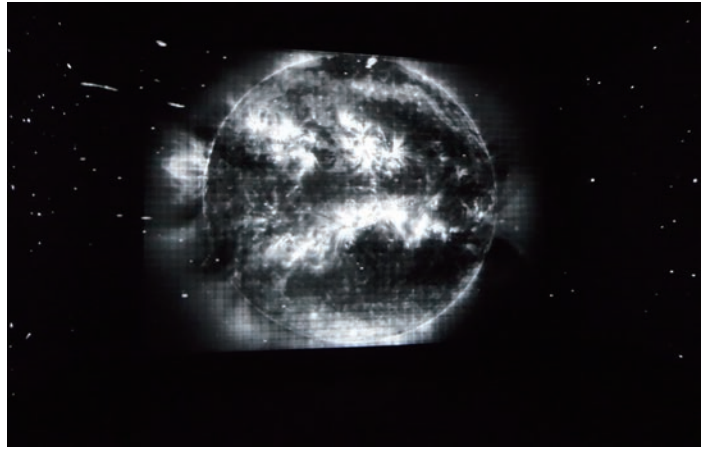
椿さんをインタビューした際に、展覧会の内容を「ループ」という言葉で説明してくれたの思い出し、納得した。

「展覧会は宇宙観から始まり、宇宙旅行で終わる。しかし、最後に人間は宇宙に出て行って終わるわけではない。宇宙観と宇宙開発は密接に関わっており、全ての科学者が宇宙を『わからないもの』と思い続ける限り、結局宇宙観の問題に戻る。だから展覧会もループしています」

取材・文・撮影(*)・レイアウト
= 椋田大揮



トム・サックス《ザ・クローラー》展示風景 (*)



セミコンダクター《プリリアント・ノイズ》(映像作品) 展示風景 (*)



パトリシア・ピッチニーニ《ザ・ルーキー》展示風景
(写真提供: 森美術館)



岡吉国宗《流星刀》展示風景 (*)



コンラッド・ショウクロス《タイムピース》展示風景 (*)

Whoops! 考

洋服と和服の境界線を考える

従来のルールやしきたりが多くあることで、敷居の高くなってしまった現在の着物文化。着物が高級でフォーマルなものとなってしまった今、それをあえて打ち砕き、文化を発展させる試みを行うブランド、「DOUBLE MAISON」の世界を覗きながら、洋服と和服の境界線について考えを巡らせた。



本誌の取材に答える「やまと」の矢嶋孝敏会長

DOUBLE MAISON (ドゥーブルメゾン)

着物小売業の「やまと」とトップスタイリストの大森仔佑子氏が2011年から提案しているブランド。同ブランドのウェブショップと、なでしこ各店舗で販売中。着物と洋服を「身につけるもの」という大きな視点をもって従来のルールに制約されない生きたコーディネート提案する。年齢や時代、場所といった境を超え洋服と着物の垣根から自由になっておしゃれが大好きな永遠の女の子たちの夢を共有するクローゼットがコンセプト。

着物会社である「やまと」から2011年に誕生したブランド「DOUBLE MAISON」は、着物本来の美しさを守りながらも、洋服的な要素を取り入れたクロススタイルテイストだ。その証拠に、ブランドの中に着物と洋服が混在するといった、従来の型にはまらないブランドとなっている。「DOUBLE MAISON」が提案する服飾の数々はその特徴から一度見たら忘れられない、独自の魅力がある。昨今の着物文化に対する高級でフォーマルなイメージは根強く、そんな業界の中でのブランド設立は意思のあるチャレンジ精神が感じられる。

元々80年くらい前の日本では、着物を着て生活することが当たり前だったことは周知だろう。戦前の日本にとって、カジュアルな着物は主流であり、掃除洗濯など人間の営みを全て着物で行っていた。当然、この時代にも絹で出来た着物は高級品であり、カジュアルでリーズナブルなものを日常生活で使用していたことになる。大きな変化があったのは戦後だ。日本の敗戦後、アメリカナイズされていく日本社会で洋服が瞬く間に広まっていき、失われる着物文化の生き残る道は、フォーマルで高級志向になることだったと言える。主に結婚式と成人式で使用されるが、フォーマルであれば必要性が生じ、現在でも意味のある根

強い文化として残っている。それによって、個人で買う着物から、人生の節目に着られる、家族で購入する高級着物へとシフトチェンジして現在に至る。

このことについて、「やまと」現会長の矢嶋孝敏氏は「2020年きもの森構想」として話をする。そもそも戦前の着物文化には多様性があった。それは多種の木々が集まり四季折々の顔を見せる森のようであったが、戦後多様性を失い、高級着物という杉林へと変化した。その杉林をもう一度森へと戻すことが大きな目標だという。

そもそもどのようにしてブランド設立に至ったのか。そのきっかけには矢嶋氏のほかにある人物が大きく関わっている。矢嶋氏は、以前から洋装化された現代生活に溶け込むような着物作りの構想を持っていたという。「DOUBLE MAISON」が誕生する以前の2004年に設立したブランド「なでしこ」では、既に若年層向けのリーズナブルかつファッション性の高い着物作りを行っていたが、その中で着物本来の美しさやフォルムを生かした着物を作りたいと考えるようになった。そんな中、新ブランドの企画を持ち込んだ人物が、有名雑誌に引っぱりだこであるトップスタイリストの大森仔佑子氏だ。大森氏の提案する、洋服感覚で気軽に着られる「かわいい」着物。元々の矢嶋氏が考えて



いた構想と重なったことでブランドが誕生した。

「DOUBLE MAISON」の魅力は、なんとといっても大森氏の生み出す世界を100パーセント実現していることだろう。提案される着物は、和柄に留まらずパールやギンガムチェックといった、まるで洋服のような柄が目を引く。生地にも大森氏が好きだという、レースで作った着物やバルベットの袖にあしらうなど、「かわいい」を作るためのこだわりが伺える。一方で洋服には、スタイリストというハードワークの中でも動きやすい機能性を備えつつ、女性特有のエLEGANSSさをちりばめた大森氏の私服を参考にすることで、世界観を作り上げている。同じブランドとして統一性があることで、買い手のアイデア次第で着物でも洋服でも楽しめるアイテムが出来上がっているのだ。

こだわりはそれだけに留まらず、ウェブサイトを見ても明らかである。ウェブサイトを開くと、架空のアパートが現れ、そこに住む女の子たちのクローゼットを覗くことができる。当然、女の子たちは好きなものも性格も違うので、クローゼットには各自の好みにあった着物や洋服が並んでいるのだ。ストーリーを読んでいると、まるで自分自身がアパートに住んでいる彼女たちになったような気持ちになり、着物や洋服一

つ一つに別の想いが込められていることが伝わってくる。

「DOUBLE MAISON」の着物作りには、固定概念を覆すような斬新さが必要不可欠である。しかしそれと同時に、着物のフォルムを変えることはしないという強い信念が存在する。着物と洋服の違いと魅力について、矢嶋氏は「フォルムとスタイル」という言葉を使って教えてくれた。着物は決まったフォルムを維持しながら、季節によって着こなし、つまりスタイルが変化していく。言うなれば、フォルムは1つでスタイルは無限大に存在する。しかし、洋服の場合は形の違うアイテムが無数に存在するが、用途によって違うフォルムのものを使用することになる。フォルムは無数にあるが、スタイルは1つである。つまり、寒くなれば着物は厚手の生地に羽織りになるのに対し、洋服ではシャツからコートへ変化するのである。「フォルムとスタイル」として着物と洋服を捉えると、同じ服飾であっても真逆の発想であることに気づく。異なった魅力を持つ着物と洋服だからこそ、橋渡しのファッションを提案することが「DOUBLE MAISON」の要になっている。

取材・文=小林真弓
撮影=代居知己
レイアウト=小川敦生



安部未来さん (木下大サーカス団員)

入社数ヶ月でパフォーマンス部に異動

ライオンや象の曲芸、空中ブランコ、バイクの曲乗り…。木下大サーカスはサーカスの伝統芸の数々を披露しながら、全国各地を回っている。もちろん芸の難しさは尋常ではない。究極の身体能力や猛獣の調教などの特殊な能力が必要だ。仮に美大生が世間一般とは少し違った世界を生きていたとしても、やはり別の次元の存在のように思っていた。

2012年度、本誌「Whoops!」を制作している本学芸術学科フィールドワーク設計ゼミのゼミ生だった安部未来さんがそんなサーカス団への就職を決めたことには、少々びっくりした。とはいえ、それはあくまでも「少々」だった。営業職に採用されたと聞いたからだ。

本当に驚いたのは、入団して2ヶ月後くらいだったと記憶している。「パフォーマンス部に異動した」というのだ。「ええ

えっ!」という感じだった。サーカスでパフォーマンス部といえば、花形に違いない。そもそも人前でパフォーマンスを見せてお金をいただけるようなプロは、世の中の一握りの人々である。在学中に空中ブランコの修行をしていたなどという話も聞いたことはなかったし…。

2、3年後だったろうか、彼女が出演する公演を見に行った。曲芸こそしていなかったものの、鮮やかな踊りを披露していた。思い起こせば、安部さんは在学中、「ななこぶらぐだ」というベリーダンスのサークルに心血を注いでいた。踊りはその辺りでもうかなり極めていたのかもしれない。しかし、それ以上に脳裏から浮かび上がってきたのは、「根性」があったことだ。今の時代にはあまり合わない言葉のような気もする。だが、本誌を作るときでも、とにかく最後まで誌面づくりにこだわる。「自分

本誌記者出身のサーカス団員がいる。本学芸術学科を2013年に卒業した安部未来さん(右上写真)だ。営業職で入団したと聞いていたのだが、わずか数ヶ月でパフォーマンス部に異動、華やかなパフォーマーとして、世の中にデビューしたのだ。

たちで作る雑誌なんだからさあ」とほかの学生記者たちを突き付ける。当時わずか4人しかいなかったゼミ室は、いつも最高の活気を帯びていたのだ。

パフォーマンス部に異動後の努力も凄そうである。金属製の柱につかまって美しいポーズを繰り返すボールのパフォーマンスなど、夜な夜な練習している、動画で見せてくれたこともある。ボールのコンクールにも出場し、本選まで残ったこともある。最近は空中リングショーの練習に勤しんでいるようだ。こういうエネルギーを目の当たりにする機会があるのは、教員の中でも幸運なほうだろうとも思う。考えてみれば、美とエネルギーの結合は、美大にも馴染みが深いのではないだろうか。

取材= 笹木一平、小川敦生
文・レイアウト= 小川敦生
撮影= 遠藤菜摘



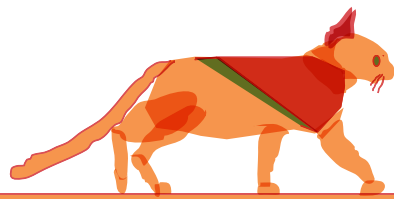
やはりパフォーマンス部に在籍している本学絵画学科版画専攻出身の佐久間翔さんも木下大サーカスの同僚とのこと

【公演情報】

木下大サーカス宮崎公演
2016年10月8日～12月5日、
イオンモール宮崎特設会場(宮崎市)

特集

童画



画面いっぱいに広がる不思議な景色や巨大な怪物、すこし甘酸っぱいロマンスや本の中でしか会えない面白おかしい住人たち…。一冊の絵本にはそこでしか出会えない生き物や住人、景色や出来事がたくさん詰め込まれている。そこで欠かせないのが絵本や童話、童謡に使われる絵だ。このジャンルの絵画を指して「童画」という。童画はいつ生まれたのか？ 絵本に描かれた童画の力とは？



童画の誕生をめぐる展覧会に出かけてみた

東京の目黒区美術館で夏に開催された「童画の国から - 物語・子ども・夢」展。展示されていたのは、絵本や童話、童謡の本に使われている「童画」。幼少の頃を思い出し、わくわくしながら「童画の国」を探訪した。

8月下旬、東京・目黒の目黒区美術館で開かれていた「童画の国から - 物語・子ども・夢」展を訪ねた。絵本や童話、童謡などの書籍の挿絵が展示されていた。作者は、大正から昭和にかけて絵雑誌『コドモノクニ』などの雑誌や童話集を手がけた武井武雄と初山滋、そして後に

工業デザイナーとなる秋岡芳夫の3人。子どもの頃に読んだ絵本や童謡の本の記憶が甦った。

このジャンルの絵画は「童画」と呼ばれている。「童画」とは子どもが描いた絵ではなく、大人の画家が子どものために描いた絵のことを指す。「童話」「童謡」と同じ使い方だ。その「童画」をジャンルとして確立したのが武井武雄と初山滋だったという。武井は「おやゆびひめ」や「ながぐつをはいたねこ」など、初山は宮沢賢治の「注文の多い料理店」など、今の自分たちでも思い出せるような物語の絵を描いており、この展覧会でも見る事ができた。

彼らは、それまでは物語に従属する存在だった挿絵を書籍の主役にする。絵本などの出版を通じてイソップなどの童話を自分の家で夢中になって楽しむ子どもたちの姿を想像してみた。テレビもなかった時代におそらくは今ほど身近ではなかった異国の世界をイメージした絵の数々は、子どもたちにとってすごいインパクトを持っていたのではないだろうか。

さて、実際に展示室を歩いてみる。初山滋の「水仙月の四日」は、水彩の作品だった。絵本の原画である。黒い背景の中央に、反対を向いた白い象と薄紫の象が上下に2頭並べて描かれている。上の白い象の上を白い冠とドレスを身につけた少女が片足を上げて滑り降り、薄紫の象の左には赤い頭巾をかぶった少女の姿がある。解説パネルに目を向けると、「水仙月の四日」が宮沢賢治の「注文の多い料理店」に収められた話の一つであることが分かった。

人間の目には見えない「雪童子」「雪狼」と赤い頭巾を被った少女のかかわりを描いたのが「水仙月の四日」の話。最初はいたずらをするものの、終盤では吹雪の中で少女を助ける雪童子の優しさが描かれている。解説を読んだ後、改めて作品を鑑賞すると、白い冠の少女は雪童子、赤い頭巾の少女が実は赤い毛布を被っており、2頭の象は

実は象の形をした雪の丘だったことに気づいた。絵が実に不思議な体験をさせてくれたのだ。

武井武雄の「ことりのしろちゃん」は、原画のひとつひとつに出版物に掲載されていた物語の文がパネルで添えられており、絵本のページをそのまま展示したような構成となっていた。会場では、読み聞かせながら絵を見歩いていた親子に遭遇した。「童画」ならではの展示方法だろう。幼少の頃に読んだ絵本を思い出し、かすかに懐かしさがこみ上げてきた。

展覧会を企画した目黒区美術館学芸員の佐川夕子さんになぜこのような展示にしたのか聞くと、「そのものを楽しんでもらいたいと思った」という答えが返ってきた。童画の多くは物語を伴う。つまり原画であっても物語と一緒に味わうことで、その魅力を全身全霊で受け止めることができるのだ。佐川さん自身、展示作品を1枚ずつ選ぶ過程で、「物語が見えてきた」という。

通常の物語とは別の視点で興味深かったのが、武井の「てじな」という作品だ。手品をしている男の子を背後から捉えた構図で、6人の大人と18人の子どもが座ってこちらを見つめている。手品をしている子が、右手でピンポン球のような玉を後ろに隠して持っているのが印象的だ。6人の大人のまるで同じような笑顔とは対照的に、子どもたちは首を傾げたり、目を見開いて見つめていたり、隣の子どもを小突き、話しかけたりしている。この作品は「子ども」と題された展示エリアにあった。佐川さんは、「『子ども』に分類した作品は、その辺りにいそうな子どもの一瞬を捉えているものが描かれた作品を選んだ」と言う。子どもはいつもおとなしくしているわけではなく、けんかをしたり、親の言うことを聞かなかったりとわがままだ。童画にそんなリアルティーを見ることができると気づかされ、はっとした。

会場の一角には「童画の国と

しょかん」という区画が設けられており、武井と初山が制作に関わった絵本を実際に読むことができた。ほぼ正方形の区画の中央にテーブルと小さな座布団があり、床には絨毯が敷かれている。座布団に座って、武井武雄の作品の一つ「ラムラム王」を読み始めると、あっという間に描かれた世界の中に引き込まれた。佐川さんによると、この「童画の国としょかん」の設置は、「当初は考えていなかった」という。しかし、来場した人々に童画をできるだけゆっくりに楽しんでもらいたいという自らの思いや、関連書籍などを置いてさらに作家たちのことを深く知りたいという来場者の欲求に答え、さらには親子連れが寝転んで絵本などの童画を楽しめるスペースを作ろうと考え直し、設置したという。ここで読める絵本は復刻版だが、今は入手できなくなっているオリジナルを、童画が生まれた当時と同じスタイルで読めるのはとても有意義だと感じた。

取材・文・撮影・レイアウト
= 椋田大揮

「童画の国から - 物語・子ども・夢」展
目黒区美術館、2016年7月16日～
2016年9月4日（終了しました）



武井武雄は「ラムラム王」などの作品で知られる



特集 童画

ミロコマチコの絵本に見る「童画」の力

ある日、書店で、ふと目をとらえた本があった。著者の名はミロコマチコ。独特の絵の具の塗り方や線の引き方に躍動感を感じる絵本だった。ミロコマチコさんの絵本を通して「童画」の力を知る。

時々足を向ける書店で、ミロコマチコさんの本が目をとらえたのは、この9月のことだった。プロフィールを見ると、1981年に生まれ、2013年に第18回日本絵本大賞を受賞した絵本作家だった。気になったので、その後いくつか購入して読んでみることにした。

まず始めに手に取ったのは、『てつぞうはね』（ブロンズ新社）だ。表紙には、明るい黄色の背景に前足を突き出し、首をかしげた白い猫とともに、『てつぞうはね』という書名が朱色の文字で書かれている。ページをめくると、著者のミロコマチコさんが飼っていた猫「てつぞう」をめぐる話であることがわかった。「てつぞうはね わたしのねこ しろくてふかふかのねこ すわるとおにぎりみたい すごくでっかいおにぎり」という言葉から始まり、「てつぞう」の体重や行動や好物、春夏秋冬折々の行動などさまざまなことが叙述されている。多彩な線が織りなす躍動感のある絵は、「てつぞう」に命を吹き込んでいる。童画は子ども向けに描いた絵だが、おどろきな描き方ではおそろしく生命感が出ない。だからこそ、絵の奥から情感がにじみ出てくるのだろう。

特に印象に残ったのは、「てつぞう」が誰もが恐れる暴れ猫であることを紹介する場面。雑然と塗られた朱色の背景に、灰色の線が画面内いっばいに回転するように描かれ、その中で「てつぞう」が、目をかっと見開き、周りを充血させ、牙をむき出しにしながら真っ赤な口を開け、尻尾をノコギリのように尖らせながら爪をひん剥き、威嚇する様が見開きを埋めている。ページを開いたとき、思わずひるんでしまうととも、猫が威嚇する様子を絵の具の色や塗り方、線の引き方によって巧みに表していることに感心した。分かってはいたつもりだが、子ども向けの本も捨てたものではないの思いを新たに。絵本にこんな表現があったのかとしみじみと思いつつ、別の本に目を向ける。

次に開いたのは、『つちたち』（学研プラス）という絵本。描かれているのは、地面を構成する土の粒子の一粒一粒だ。「おはよう つちたち」と太陽が土に言う場面から始まる。太陽は草の根にあいさつしながらその湿り気にうっとりし、ミミズのような「にゆるにゆる」にかき回されるくすぐったさに笑い、トカゲや恐竜が土を踏みしめる「どんどこ

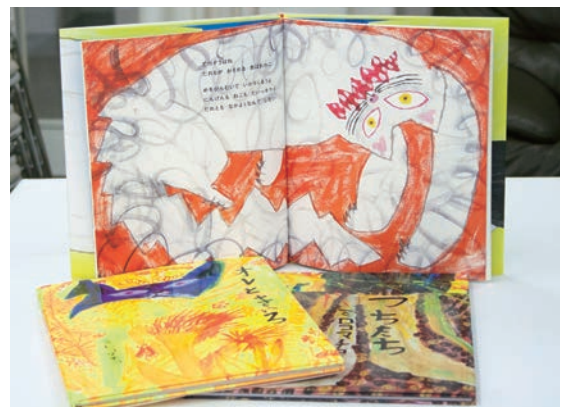
ダンス」に合わせて飛び跳ねて踊り、巻き上げられながら歌を歌う…。さまざまな生き物や自然現象に対して変化する土の様子が生き生きと描かれている。読んで楽しさを感じるとともに、普段から踏みしめている土に対して、このような見方があったのかと、目からうろこが落ちる思いを味わった。絵のみを見返してみても、土の一粒一粒が表情豊かに描かれている。

最後に読んだのは、『おれときいろ』（WAVE出版）。自分のことを「おれ」と呼ぶ紺色の猫の視点で描かれた作品だ。物語は「おれ」の主観のもとで進行していく。ある日突然やって来た小さな黄色の点「きいろ」と葉の一枚も生えていない木の上で出会った「おれ」は、腕を伸ばし、木を駆け下り、飛びつきながら、てんとう虫やモグラ、稲や風など、さまざまな生き物や植物に変化する「きいろ」を捕まえようと奮闘する。さまざまに変化する「きいろ」を捕まえようと駆け回る「おれ」は無数の虫や草に変化した「きいろ」を残らず捕まえようとすると「ぐわおわおわおー」という吠え声にひっくり返り、獅子や熊、豹や昆虫の幼虫などさまざまな生き物に変化した「き

いろ」が洪水のように押し寄せる光景を目にする。最後に「きいろ」は無数の黄色の点になり、最初に「おれ」と出会った木で花のように咲いた。無数の生き物となった「きいろ」が洪水のように押し寄せる光景は、黄色と朱色が混ざり合い、まるで黄金のようにまぶしく見える。生きとし生けるものに宿る命のまぶしさを感じるとともに、「きいろ」が変化した獅子や熊の迫力に圧倒された。「きいろ」は大人が考えると単なる色の名前前で抽象的な存在でしかない。しかし子どもの感性は、理屈に邪魔されずに、その「きいろ」を物語の登場人物として認識するだろう。そして大人にも気づきを与えてくれるのだ。やはり童画の力はあなどれない。

文章が短い絵本という出版物では、小説などの挿絵とは違って絵が物語の空気を作る。読者は絵が生んだ世界の中を歩くことになる。ミロコマチコさんの絵本は、童画という子ども向けの絵が実に豊かな内容を伝えてくれることを教えてくれた。

取材・文・撮影・レイアウト
= 椋田大揮



Column 飛び出した童画



①ミロコマチコ+EHON LABO.《あっちの目、こっちの目》展示風景（「みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ 2016」より） ②③いしいしんじと荒井良二のコラボレーション作品展示風景（「みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ 2016」より） ④⑤田島征三《青空水族館》展示風景（「瀬戸内国際芸術祭 2016」より）

絵本は出版物として制作されるのが普通だ。ビジュアル的な要素は通常は絵、すなわち平面で表現される。一方、絵を描いているクリエイターには、潜在的な力を含めて、さまざまな表現手法を持つ人がいる。いつもは紙に絵を描いている作家でも、時に平面を超えた表現をしようと思うこともあるだろう。近年、各地で開かれるようになった芸術祭が、その可能性を切り開いている。絵本作家が展示に参加する例が増え、立体表現をした作品がいくつも出てくるようになったのだ。

絵本作家として著名な田島征三さんが新潟県の山あいで開催される「大地の芸術祭」に《鉢&田島征三 絵本と木の実の美術館》という作品で参加したのは2009年（今年は11月29日まで

公開）。十日町市で廃校になった真田小学校の校舎の複数の教室を使って立体作品の展示をした。内容はまさに立体絵本とも呼ぶべきもの。海で集めたという流木や木の実に絵の具を塗ったものなどを材料にして、実在した小学生をモデルにしたという子どもたちや動物をかたどったオブジェが、いくつかの教室の中を飛び跳ねるかのように絵本の絵さながらに配置されている。展示を見て感じるのは、童画の力である。子どもたちに語りかけようという作者のエネルギーが、空間に満ちているのだ。

2013年の瀬戸内国際芸術祭では、田島さんは大島会場で立体童画を展示した（11月6日まで開かれている今年の同芸術祭でも見ることができる）。《青空水

族館》と題した廃屋利用の建物の中に人魚姫がいたり、海賊がいたり。子どもたちに親しんだ童画スタイルのキャラクターは、大人の心の中にノスタルジーを呼び起こす。

今年9月3日から25日まで山形市で開かれた「みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ 2016」で芸術監督を務めたのは、絵本作家の荒井良二さんだ。縦が1メートル以上もある大きな木製の本に作家のいしいしんじさんが書いた物語の表紙を、荒井さんが描いた。動物のような何かを描いた荒井さんならではの絵の具のタッチは、童画が大画面の絵画として成長したものに映る。

そしてこの芸術祭では、左ページの記事でも紹介した絵本作家のミロコマチコさんが、ま

さに童画から飛び出して来たかのような立体作品6点を展示した。ヘビやカモシカなどの動物が屋台のような台車を引くなどの場面を表したものだ。「物語」を感じるこれらの作品は、昔話に着想したものかと思いきや、実は現代の話だった。ミロコマチコさんがEHON LABO.というグループのメンバーと山形を囲む山と町の際の地域で住人たちに動物との出会いについての聞き書きを重ね、そのうちの6つの話から着想を得た物語を創作、さらに立体化したというのだ。童画特有の訴求力がここにはある。

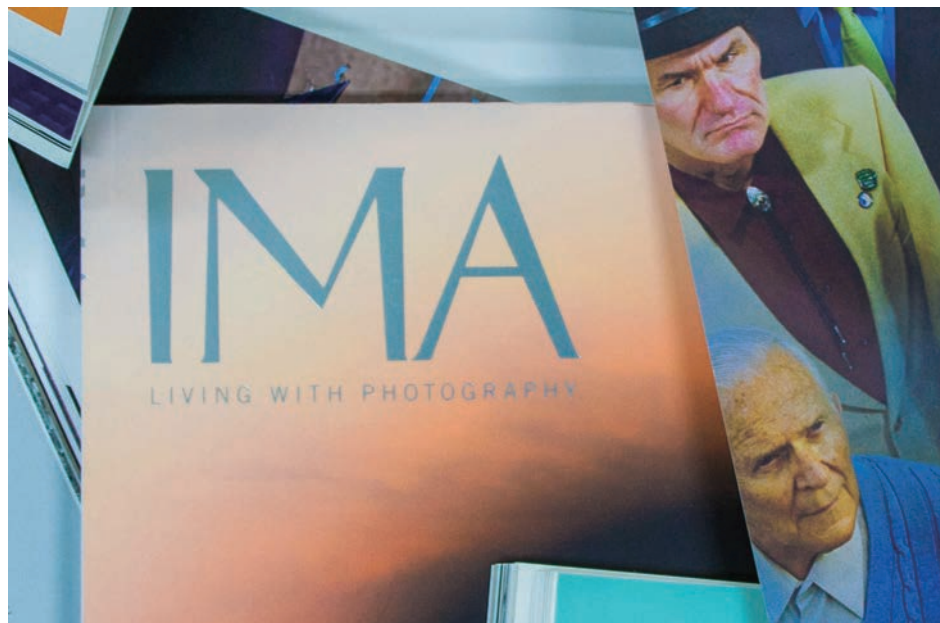
取材・文・撮影・レイアウト

=小川敦生

TAMABI REPORT

上坂真人 (アマナ アートフォト事業部・執行役員)
写真雑誌『IMA』の目指す「健全なアートマーケット」とは

『IMA』とは、“LIVING WITH PHOTOGRAPHY”をテーマに掲げながら、様々なアート・フォトを紹介するだけでなく、アーティストによって制作された写真と、それを見る鑑賞者とのいい関係を作ることを標榜する写真雑誌である。人々が「写真とともに暮らす」ことができる環境を作り上げるために、『IMA』は何をしてきたのか。9月24日、創刊準備の段階から現在まで『IMA』の中心を担ってきた上坂真人氏が、本学で特別講義を行った。



『IMA』のバックナンバー



講演中の上坂真人氏(*)

(うえさか・まこと) 1957年東京都生まれ。80年早稲田大学卒。80～84年、朝日新聞社出版局(現・朝日新聞出版)。その後、日経マグローヒル社(現・日経BP社)、マガジンハウス、日経コンデナスト(現・コンデナストジャパン)、アシェット婦人画報社(現・ハースト婦人画報社)を経て2011年からアマナへ。「週刊朝日」(朝日新聞)、「ブルータス」(マガジンハウス)、「VOGUE」(コンデナスト)、「ELLE」(アシェット)など多くの雑誌を担当したほか、「日経デザイン」(日経マグローヒル)、「CASA BRUTUS」(マガジンハウス)、「GQ」(日経コンデナスト)などの雑誌では創刊に携わった。アマナが2012年に創刊した写真誌「IMA」ではプロデューサーを務めている。

「写真」というコンテンツは現代人の生活と切り離すことはできないもの、といっても何ら過言ではないだろう。例えば新聞記事の中に、電車の中吊り広告の中に、街中で友達とピースサインと笑顔を向けるスマートフォンの中に、写真は現れる。“LIVING WITH PHOTOGRAPHY”、つまり「写真とともに暮らす」といわれても、そんなことは当たり前じゃないか、と考えてしまいそうだ。しかしながら、まさにその“LIVING WITH PHOTOGRAPHY”をテーマに掲げる写真雑誌『IMA』が提案する「写真との生活」は、ただ単に新聞記事や思い出の一部としてのそれと触れ合うように写真に関わるということではない。『IMA』が紹介する暮らしの相棒は、アート・フォトなのである。

『IMA』の発行に創刊準備のころから携わり、アート・フォトの世界を凝視してきた上坂真人氏は、一例として、上から俯瞰して撮った大量の写真を切り貼りして一つの作品にする西野壮平という若い写真家の名を挙げた。日本ではそれほど知られていないが、海外ではとても人気があり、アートフェアなどによく作品が出品され

ているという。荒木経惟や森山大道はすでに世界でも、アート・フォトの大家だ。

日本の写真にはこのように世界に誇ることができるコンテンツがあるとしながら、「(数年前に『IMA』の創刊準備を始めたころのアート・マーケットには)本当にコンテンツに投資をするようなメディアが少なく、また、ビジネス論が介在することもなく抽象的な方向に傾いてしまうことがしばしばあった」と上坂氏は語る。そこで、アート・フォトという分野で、「広い意味での健全なメディアを作り、健全なアート・マーケットを活性化させる」ことを目的に、『IMA』創刊のプロジェクトは動き始める。そのために、『IMA』はこれまでの雑誌にはない工夫をしている。まず、この雑誌を手に取りページをめくるうちに、その雑誌が光沢のある紙、マットな質感の紙など、ページによって異なる紙によって構成されていることに気づくだろう。ある号では8種類もの紙を使ったという。それはそれぞれの写真にふさわしい紙で読者に見られるように雑誌をデザインするという姿勢の表れである。そして雑誌はただアート・

フォトを中心にアートについて紹介するだけではない。アート・フォトを購入する流れをわかりやすく説明するコーナーを設けるなどして、読者にアート・フォトが買うことのできるものであることが分かるように積極的に働きかけているのだ。

雑誌を超えた活動もしている。2011年から「アマナ・IMA・メディアプロジェクト LIVING WITH PHOTOGRAPHY」と題した、10年かけて戦後日本の写真を鳥瞰するようにコレクションするプロジェクトを始めた。創刊後には、『IMA』の読者が気軽に作品に触れ購入を検討できる場所としての「IMA CONCEPT STORE@ROPPONGI AXIS」をオープンした。さらに、こうして形作られた「アート・フォト——メディア——人」という関係に加え、もともとはストックフォトの会社である出版元のアマナの営業ネットワークを駆使して、さらに企業との結びつきを作ろうとした。この関係の中に企業を組み込むことで、企業がアーティストを支援するようになる。下手をすると企業の営利活動ともとることができ、そのバランスを保つのが非常に難しいこ

とを認めながらも、上坂氏はあえて「アート×企業の素敵な関係」を作ろうとしたという。その試みは三越伊勢丹との「LIVING WITH PHOTOGRAPHY@新宿伊勢丹」や、パリで開催されたPANASONICとの「PANASONIC × amana LUMIX MEETS JAPANESE PHOTOGRAPHERS」など、様々な形で実を結んでいる。

上坂氏は講演の中でたびたびアート・フォトを「飾る」ということについて話していた。『IMA』の美しい写真を見るだけではなく、家の壁にアート・フォトを飾る。それは人々が自ら「アート——メディア——人」の三者による「素敵な関係」の中に飛び込んでいくことにほかならない。企業、アーティスト、メディア、コンシューマーが一体となって回す「アート・マーケット」の循環。その意義を考え、自らとアートとの間柄について、ひょっとしたらもっと親しくなるのではないかと思いを巡らすのも、素敵なことではないだろうか。

取材・文・撮影(*)・レイアウト
=増田啓志

∴ Whoops! 鑑賞記 ∴

『死体解剖医ヤーノシュ』(DVD)

ある死体解剖医の日常を追うドキュメンタリー

もし毎朝解剖室で死体と向き合うことが日常だったとしたら…。このドキュメンタリー映画に登場する解剖医ケシェリユー・ヤーノシュはその一人である。ネットを検索すれば解剖の様子を簡単に見られる今の時代でも、この作品には並々ならぬ説得力がある。

ドキュメンタリー映画を普段見ないという人は多いだろう。ただ、もし解剖学に興味があるのなら、この『死体解剖医ヤーノシュ』はぜひ見てほしい。本物の死体を解剖する一部始終がはっきりと映し出されているのでその点だけは十分注意して視聴したいが、ある死体解剖医の日常を追ったこの作品は同時に解剖学的資料としての一面を持つ。何せ彼の仕事は人体を解剖し隅々まで調べることだから当然だ。

この映画が制作された1995年当時ならともかく、今はイン

ターネットでこういった死体解剖の動画を見ることは難しくない。それでもこの作品を見ることをぜひおすすめする。言うまでもなく、インターネット上の映像は、品質が保証されているわけではない。一方、この映画ならば、カメラワークや映像の品質はバッチリだ。特に優れているのは、効果音がしっかりと聞こえていることだろう。映画ゆえの演出の妙味というべきか、むしろ映像以上に切迫した音響が無比のリアリティーを生んでいる。ある意味心地よく聞こえるこの音を頼りに、場面は粛々と展開す

る。この制作姿勢こそがこの映画の最大の特徴であり、同時に唯一の演出でもあるのだ。もともと、ドキュメンタリー映画ならば内容が重要であり演出は事実を誇張しないよう努めるべきだが、この映画ではその点が実に巧妙に計算されている。

この映画が視聴者に問いかけていることは、明らかに命の存在についてである。それゆえ、あえて死体解剖を学問的な視点で見られるような場面などはあまり登場しない。そこにあるのは、抒情的で漠然とした問いかけである。ヤー

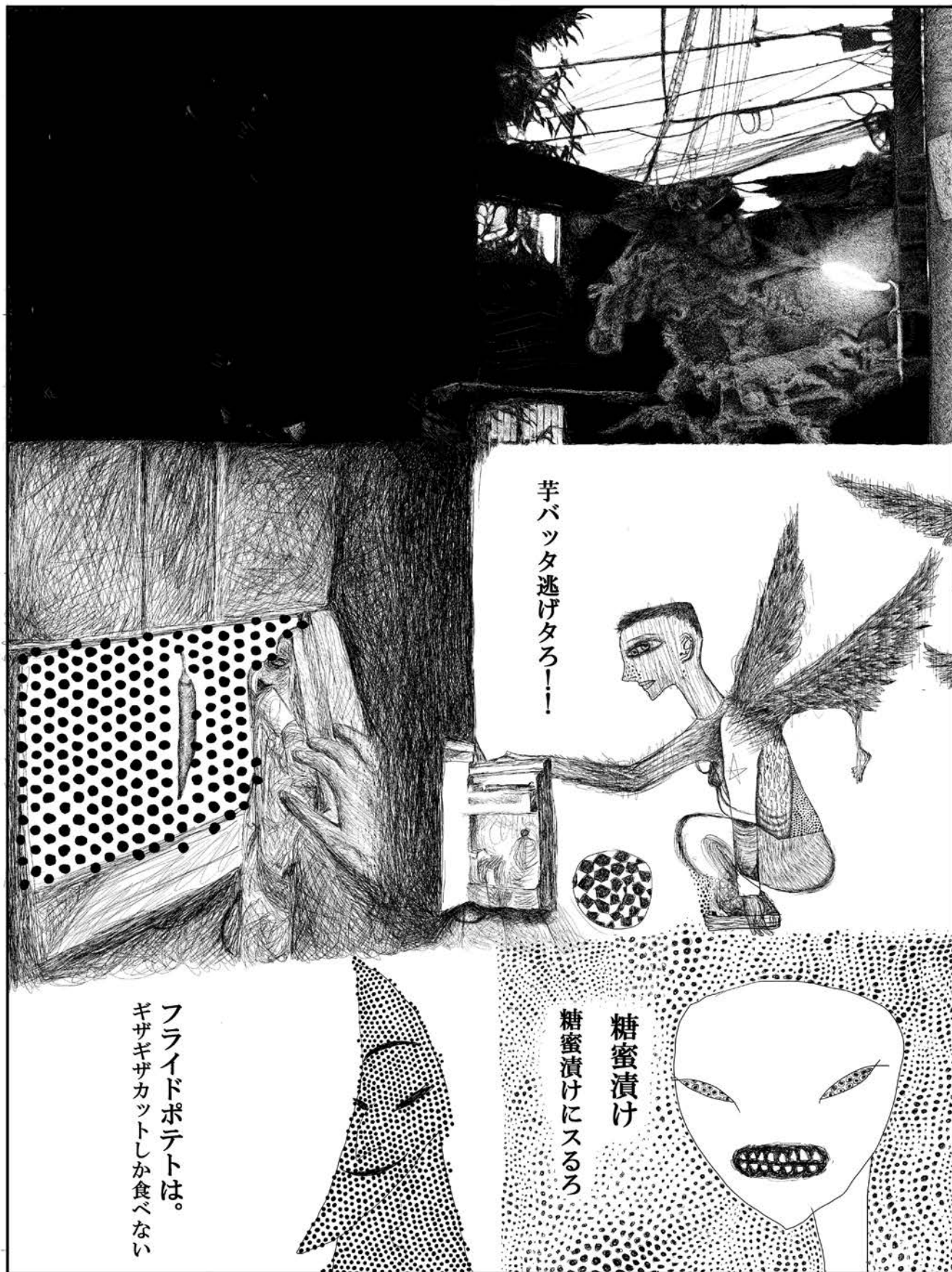
ノシュ自身も、「どんな唯物論者であっても魂の存在を信じるだろう」と言っている。確かにあのゴム人形のように扱われる死体に生命力を感じることはできない。作品中ではしばしばカメラの急な切り替えで生きた人間との対比をして、両者の違いをはっきりと描き出している。かと思いきや、ゆっくりとしたカメラワークによるまったく逆のやり方で視聴者を翻弄することもある。この巧妙な技には心底はっとさせられる。



『死体解剖医ヤーノシュ』/DVD 発売：2002年 / 監督：ロバート・エイドリアン・ペヨ / 出演：ケシェリユー・ヤーノシュ / 音楽：ポール・ウインター / 販売元：アップリンク

文・イラスト=横山亮

面白まんが「ブラフマ」



本誌主催 芸学ヴィジュアルコンテスト 2016 秋 結果発表!

大賞 該当なし

佳作 横山榛奈 《何か見えそう》



■審査員のことば

どちらが上なのか分からない。脳内の混乱を呼ぶ。それがこの作品の妙味だ。世の中、上だと思っていたことが実は下だったりすることがある。見方を変えれば、解決につながる問題もたくさんあるのでは? そんなことを、横山さんの作品から教えられるような気がした。(小川)

「Whooops!」誌初の試みとして、芸学ヴィジュアルコンテストを開催しました。ご応募ありがとうございました。応募総数は1点でしたが、コンテストを開いた甲斐のある作品をお寄せいただきました。今後も継続開催の可能性を探っていききたいと思います。

【主催】

フィールドワーク設計ゼミ発行アート誌「Whooops!」

【応募資格】

・2016年度、多摩美術大学芸術学科に在籍している学部生。

【作品形態】

・印刷媒体上での表現を前提にしたヴィジュアル作品。イラスト、写真(合成写真等もOK)、コンピューターグラフィクスなど技法は問わない。ポスターのように文字を組み合わせた作品も可。ただし、たとえば油彩等で描いた場合も、原画ではなく撮影またはスキャンしたもののプリントアウトが審査の対象となる。

【審査員】

・海老塚耕一教授、家村珠代教授、小川敦生教授

※そのほか詳細については、下記ウェブサイトをご覧ください。

<http://www2.tamabiac.jp/geigaku/0725-contest2/>

額縁・画材・デザイン用品

多摩美術大学生支援セール

実施中のお知らせ!!

学校まで直接配達だから、とっても便利!!

詳しくは校内設置、又は配布しておりますチラシをご覧ください。

- 張りキャンバスが安い!
- 木枠、木製パネルが安い!
- カットキャンバス、ロールキャンバスが安い!
- 油絵具、画溶液が安い!

***** 安い価格のほんの一例 *****

世界堂製張りキャンバス(カルワク) F100	大特価 ¥11,300(税込)
世界堂製木枠(杉材) F100	大特価 ¥9,900(税込)
木製パネル F100	大特価 ¥9,000(税込)
カットキャンバス 麻 100%(中目) F80	大特価 ¥4,000(税込)
カットキャンバス 麻 100%(中目) F100	大特価 ¥4,800(税込)
世界堂製画溶液ペインティングオイル 1,000 ml	40%OFF ¥2,650(税込)
世界堂製画溶液テレピン 1,800 ml	40%OFF ¥4,700(税込)
世界堂製ブラシクリーナー 2,000 ml	40%OFF ¥1,400(税込)
世界堂ロールキャンバス C&TC 中目 1.4x10m	大特価 ¥12,700(税込)
ホルペインアクリラジェツソ 900 ml 詰め替え	大特価 ¥1,600(税込)



ご注文、問合せは (株)世界堂 多摩美術大学生支援セール係
E-mail gaisho@sekaido.co.jp FAX.03-5360-4010 TEL.090-3716-4575

豊富な品揃えと満足プライス日本最大級専門店チェーン

新宿本店 TEL.03-5379-1111 〒160-0022 東京都新宿区新宿3-1-1 (営業時間 9:30~21:00まで)

- | | |
|------------------------------------|--|
| 池袋バルコ店 (池袋バルコ 6F) ☎03-3989-1515 | 相模大野店 (相模大野モアーズ4F) ☎042-740-2222 |
| 立川北口店 (クリサス立川5F) ☎042-519-3366 | ルミネ横浜店 (ルミネ横浜 8F) ☎045-444-2266 |
| アートマン店 (京王アートマンA館3F) ☎042-337-2583 | ルミネ藤沢店 (ルミネ藤沢 4F) ☎0466-29-9811 |
| 町田店 (町田市原町田4-2-1) ☎042-710-5252 | 新所沢バルコ店 (新所沢バルコLet's館3F) ☎04-2903-6161 |
| | 名古屋バルコ店 (名古屋バルコ東館5F) ☎052-251-0404 |



インターネットでお買い物 <http://webshop.sekaido.co.jp/>
SEKAIDO ON-LINE SHOP 世界堂オンラインショップ 検索

情報満載!世界堂のホームページ <http://www.sekaido.co.jp/>



YOO, GEUN-TAEK



柳根澤 召喚される絵画の全量

The Whole Gravity of Painting, Summoned

2016.9.24 sat → 12.4 sun

多摩美術大学美術館